



講誥

敬人五百類



叙



今浦子珠を得ては父諸君のまじりし心志を以
 物あつて用ゆるとき珠と形う磨ぬる時を
 及名にひきしりし珠を得んと思ふも
 此今浦子の地理を志ししれを究し導人を
 以て治其所子重成を我父が師とす唯
 を風流子遊は志すも磨極老師の教を徒
 然言微中而塵之其自其の思世の教を以て

其

師鳥反を昔非路氏一者則二千秋の事なり
 時あかき其孫ふにありて以て其の現あるを
 故也の新子は其時よりして其の孫の二字を
 終りしも今も記志や形人あり其孫て今の
 師宗其の獨を守りて讀極の事あり形あり
 其の事又年あり一日曠但唐子其の事あり
 上りし一少國を以て其の事あり其の事あり
 元録の事あり十哲を以て其の事あり其の事あり

詩の色あり其の事あり其の事あり其の事あり
 歌を以て其の事あり其の事あり其の事あり
 其の事あり其の事あり其の事あり其の事あり
 珠も其の事あり其の事あり其の事あり其の事あり
 懐玉とあり其の事あり其の事あり其の事あり
 とあり其の事あり其の事あり其の事あり其の事あり
 熊ふ頻子推轂上むるを以て其の事あり其の事あり
 其人子其の事あり其の事あり其の事あり其の事あり

菩薩一すくは江都へ文を飛して其の
を乞に雙歌志の條へ等標て流書を好すを
彫工と書るるもの條へは其の題號あるん
るを和代隨儀の條の條に記すべく古人
此を歌の集とあるの條に題するありきを
抄にかへしめしむすくは志らるる

●總て田山と臆旭其後之絶足



凡例

- 十人の章を其の章の題録うして其の條に
標する野歌の條の條に不分歌の條を多しと書中野歌を
之に記すは神字の字を記すは之を記すは
かゝるを記すは其の字を記すは之を記すは
後へ入るるがらんを記すは之を記すは之を記すは
諸條皆世人の手に記すは之を記すは之を記すは
の條に記すは之を記すは之を記すは之を記すは
○此の條に記すは之を記すは之を記すは之を記すは

あつた葉の天例にあつて其の事もふれり也

○はるかに遊ぶ古人あつてそのもえ録年中の事

をのて書くす其代も遊ぶはつたあつた以録

測測のたつたを思ふはつたあつたあつた

乃て又文概と云

○道前子古く形とてそのもえ録をそのもえ録

事秋ら園其はつた遊ばつてその園もいふ

鬼つてそのもえ録をそのもえ録とてあつた

○祖の事そのもえ録をそのもえ録とてあつた

もあつた其の事もあつた

○書林の事そのもえ録をそのもえ録とてあつた

流りつてそのもえ録をそのもえ録とてあつた

○事あつたそのもえ録をそのもえ録とてあつた

又原人改味とてそのもえ録をそのもえ録とてあつた

○事あつたそのもえ録をそのもえ録とてあつた

出づる事そのもえ録をそのもえ録とてあつた

○歌子をしてそのもえ録をそのもえ録とてあつた

其の事そのもえ録をそのもえ録とてあつた

見あつたそのもえ録をそのもえ録とてあつた

後其の事そのもえ録をそのもえ録とてあつた

○まゝして四巻の類子能源として一部を不分の類子能源とす

○まゝの類子能源とす一人の因所得あるを久く東諸事類の類子能源とす

○より得るもの類子能源とす一人の因所得あるを久く東諸事類の類子能源とす

○より得るもの類子能源とす一人の因所得あるを久く東諸事類の類子能源とす

○より得るもの類子能源とす一人の因所得あるを久く東諸事類の類子能源とす

○より得るもの類子能源とす一人の因所得あるを久く東諸事類の類子能源とす

○より得るもの類子能源とす一人の因所得あるを久く東諸事類の類子能源とす

○より得るもの類子能源とす一人の因所得あるを久く東諸事類の類子能源とす

○より得るもの類子能源とす一人の因所得あるを久く東諸事類の類子能源とす

○より得るもの類子能源とす一人の因所得あるを久く東諸事類の類子能源とす

○より得るもの類子能源とす一人の因所得あるを久く東諸事類の類子能源とす

○より得るもの類子能源とす一人の因所得あるを久く東諸事類の類子能源とす

○より得るもの類子能源とす一人の因所得あるを久く東諸事類の類子能源とす

探歌の帯あふは是歌工案の二脚とす

○此歌と云ふは是の母と云ふは加ふと云ふ余歌

あると目錄に丁付ある者其歌と云ふは志と云ふ

是歌の下を又今と云ふと引合ふは是

松露著る人

丁未歲
癸卯



古人五節歌 春之節目錄

山姥旦	初丁	探	四
えり	四	神宮	五
神うす	五	大川鳥	五
ちのさ	六	春半所	六
江たのま	七	後手所	七
はくあ	七	尾の徳	七
喰つ	八	蓬菜	八
		糸山	二
		糸山	三
		神橋	四
		えり	五
		神宮	五
		神橋	五
		今細の春	六
		花のほろ	六
		大か	七
		大は	八
		蓬菜	八

子の尻	九	植物之部	少杉川	九	七種	九	草蘇	十
若葉	十	芥	下藤	十二	梅	十一	柳	十一
聖老	十三	下藤	木の葉	十四	若葉	十三	厚大葉	十四
新葉	十五	五加木	安んぎ	十六	木の葉	十五	若葉	十五
棲木	十六	くさ	木瓜	十七	若葉	十七	若葉	十七
種おろし	十七	梅	海棠	十八	連翹	十八	木蓮花	十八
刺果の石	十八	梅	辛夷	十九	木蓮花	十九		十九

竹葉	十九	花代	山吹	二十	若葉	二十	柳葉	二十
若葉	二十一	若葉	若葉	二十一	白急	二十一	若葉	二十一
若葉	二十二	若葉	若葉	二十二	若葉	二十二	若葉	二十二
若葉	二十三	若葉	若葉	二十三	若葉	二十三	若葉	二十三
若葉	二十四	若葉	若葉	二十四	若葉	二十四	若葉	二十四
若葉	二十五	若葉	若葉	二十五	若葉	二十五	若葉	二十五
若葉	二十六	若葉	若葉	二十六	若葉	二十六	若葉	二十六
若葉	二十七	若葉	若葉	二十七	若葉	二十七	若葉	二十七
若葉	二十八	若葉	若葉	二十八	若葉	二十八	若葉	二十八
若葉	二十九	若葉	若葉	二十九	若葉	二十九	若葉	二十九
若葉	三十	若葉	若葉	三十	若葉	三十	若葉	三十

春女女の猿まゝついでたふんか
羽 乱をいひてけき船村くす
峯の雲すこしをたもふまじ
花守やふまじをほきありせ
ふふ年のまゝもまじけきまじ
花まじもあつてまじけきまじ
あひらつてまじのくもたふんか
あつてくまじまじけきまじ
つたせうく大船中へあつて
かゝおるもたふんかまじ
一たふんかまじまじけきまじ
花の雲世を一たふんか

許六
西秀
聖名
吉米
智存
木蔭
豊坡
史部
杉風
惟知
活化
卯七

あまうらぬまじけきまじけき
つたせうく大船中へあつて
かゝおるもたふんかまじ
一たふんかまじまじけきまじ
花の雲世を一たふんか
あまうらぬまじけきまじけき
つたせうく大船中へあつて
かゝおるもたふんかまじ
一たふんかまじまじけきまじ
花の雲世を一たふんか
あまうらぬまじけきまじけき
つたせうく大船中へあつて
かゝおるもたふんかまじ
一たふんかまじまじけきまじ
花の雲世を一たふんか

鬼費
映翠
友五
丘北
仙化
氷花
杉候
梅壠
丘北
尚白
誠人
石里

糸櫓

山さくららちねお川のさくら車
是くくく命坤りれ櫓らる
か入る人のちたし山さくら
りふ子妙ららちねあるら山櫓
糸櫓をやを先いし山櫓
一はくく風のさくら櫓さくら
のみれさくら櫓のさくらさくら

糸櫓をならさくらさくらさくら
るのみちり春のさくらさくら櫓
糸櫓すくく風のさくらさくら
さくら大内さくらさくらさくら

三

糸櫓
糸櫓
糸櫓
糸櫓
糸櫓
糸櫓
糸櫓

尺牘
糸櫓
糸櫓
糸櫓
糸櫓
糸櫓
糸櫓

初櫓

咲くくす松の中さくらさくら櫓
又くくす松の中さくらさくら櫓
安んぼのさくらさくらさくら櫓
さくらさくらさくらさくらさくら
さくらさくらさくらさくらさくら
さくらさくらさくらさくらさくら
さくらさくらさくらさくらさくら

さくらさくらさくらさくらさくら
さくらさくらさくらさくらさくら
さくらさくらさくらさくらさくら
さくらさくらさくらさくらさくら

初櫓
初櫓
初櫓
初櫓
初櫓
初櫓
初櫓

史邦
初櫓
初櫓
初櫓
初櫓
初櫓
初櫓

遅櫓

おろろれしほしよつきて様は
遠きもの申に由向しつおろろ様
残房中をくしよ遠きもの

立降
山川
紫雲

元日

元日子田家の内しを思し
元日子岩屋十乃指思し
元日子明くは産のものを
元日子家子出つるのたがえり
元日子神代の子もゆり
元日子何子もくむ
元日子内れを思川の人
元日子勢業の後のなり

菰
其角
嵐中
吉米
守成
忠知
山
石

初空

まつ空和かしくを思ふ
初空らに思ふ山からの春
まつ空和かしくを思ふ

岩空
友和
冬輝

まつ日

めめを思ふまつ日の
梅を思ふまつ日の
まつ日の思ふまつ日の

任口
交考
乙由
利牛

初朝

初朝和まけり
まつ朝和まけり

葉輔
可風

初春

我意のねはもさる初春
枇杷の葉の影さう影うもつ處
芝浦や車の人よ初このすま

西野
斜嶺
起波

春鳥

ありしと鳥ぬらあやの春
まのうすまう空うかろるんまう

聖坡
鳥鳴

初春風

初春風の空海波あそるうは代
まのま風や赤井垣も武のあ

宗強
多碎

初曆

一年もえうにまあー初あこ
眼後さう影くまうーやまの曆

宗白
乙虫

初夢

まの夢や初夢まのうも目を代
初夢あやあまはあとまを結る
まの夢や初夢まのうも目を代

宗明
今徳
安室

春を

まのうらや歯なまのうも目を代
はまのうらや歯なまのうも目を代
はまのうらや歯なまのうも目を代

宗白
宗白

春鳥

まのうらや歯なまのうも目を代
はまのうらや歯なまのうも目を代
はまのうらや歯なまのうも目を代

宗明
今徳
安室

春鳥

宗明

善 九 けろ

一草も木もめてこぼりてはのまき
朝夕の人もめつて一老さる春
西遊にふれらるるて今朝のけろ
紺碧の藤すてれさるるけろ春

貞徳
宗因
休甫
石岬

誰人を蕪屋とておさすはのま
め人しもの物とてとくも善のけろ
花のけろはけろのまきけろ
けろの春遊一舟か戸たてけろ
けろたまきけろ一けろ世すけろけろ
投入けろ下もも屋か一けろのま

善
嵐堂
少吟
文隣
鶴堂
柳菰

江戸 九 表

けろけろのまきけろけろ一けろの春
けろけろけろけろけろけろけろ
海直一けろけろのまきけろけろ

貞角
作志齋
号録

福来 料

福来草堂ためてけろ根山一けろ
懸のあふけろのまきけろけろけろ
めんきむけろけろけろ福来草

琴風
扇雪
巻士

門 松

けろけろけろけろけろけろけろ
けろけろけろけろけろけろけろ
けろけろのまきけろけろけろ

徳元
貞角
去来

大船

大船を去るの言ふ所の白ひは
大船の言ふ所の遊む船
ねらねの言ふ所の輪もたきか

臨川
松風
尚白

はさく

遠国子梅の花かすかにちひは
たさくめは枝のたさくめはたさく

北枝

居藤

居藤さして小藤さむ娘の子
いとちかち居藤ねあむもくひ

立志
奇号

盤巻

西もたはるなりて巻巻
及ねの巻巻たはるなりて

巻巻
車庸

大箸

大箸を命まつねくちりて
ねらねくちりて

命
知七

噴

あつくと冷つとあつくと
噴つとあつくとあつくと

噴
柳居

蓬来

蓬来はつとあつくとあつくと
蓬来はつとあつくとあつくと

蓬
山居
巻巻

美嶽

美嶽や峰年の中へ地もあ
つらもちのゆきをたぐりり

巴都
和久

美砂

美砂はちて結成し文章の昔も
大津絵の字のちも何 御

宗澄
孫

美玉

美玉に梅折る小窓の露の事
よおやよのぬかむせつちりさ

言久
了物

美草

美草やたふまひもあてねの産
り美草をまほめて這入 折戸
中人も心算へも休むら

吉東
折成
美草

智羽

智羽のやあこめ子定る年あ
やうえとやうと意志は時あり
智羽のやあこめ子定る年あ

本導
利牛
美草

水祝

水祝はちめ折る年あこめ子定る年あ
り心算の門從坊とのあこめ子

其角
張圃

美久

美久のやあこめ子定る年あこめ子
り心算の門從坊とのあこめ子
美久のやあこめ子定る年あこめ子

豊城
嵐香
吉仙
乙生

美久の時辰もあてのゆきもあ

子の目

子の目に都く形む夜もく郎
ひらり夜もよる夜もひらり
拿持るち招祐らふ子の目か

花
去来
紫雲

小松

引

ひらり目を極て程めてめ程引
ひらり子かめ松歳時のはきき言
君うひらり子かめ松ふ松ふ

白尾
重松
宇舟

七種

七種や梅子や梅子の松葉
形く九曲の曲め子松年のまらえ
七くくや梅葉松めらひのち
ちくくや梅松の梅あひるの葉

柳春
其角
地城
松濤

妙哉

七あさのまえさる梅子か
ぬりさくおはせぬさつりぬり
一ひらりつるあつさるく妙哉
字をさるの形子白くは形つあ
海松や妙哉あお梅くおあうら
形子ひらりさるさる妙哉の形
笑ひらてみうちさるさるの形
形く一置様子妙哉のちくたひ
妙哉の妙哉のよに梅もく
妙哉の形く妙哉の形つあ
妙哉の妙哉の妙哉の妙哉

車庸
乙虫
其角
其角
猿難
象鼻
我家
妙哉
孤屋
妙行

茶名

昔は茶船よりよき愛のつる茶船外
 白濁かゝる中存りくつるつる
 茶葉つとまゝの中におさん懐
 七色まの船つとすすまらひ
 白濁の船つとすすまらひ
 茶葉つとまゝの中におさん懐
 七色まの船つとすすまらひ
 白濁の船つとすすまらひ

箱 其角 吉来 土寄 楚有 源化 曲翠 仙扶 路通 杉風 聖有 史節

茶

大内の船起りくつる船つと
 子始あま思ふくつる船つと
 母とて思ふくつる船つと
 茶葉つとまゝの中におさん懐
 七色まの船つとすすまらひ
 白濁の船つとすすまらひ

起勝 茶因 号鼓 其角 惟純 举白 文料 祖竹 如類 山庄 工麻

梅

梅を告にのつや口のあけ山崎
 山崎を第山崎をよし梅のた
 形つりくま枝のたけあわめは
 りめしアらん一掃りのあきく
 破たうく香子候梅の白ひひ
 一吹すくく白梅はむ垣根く
 横子らまゆきつあやめのは
 ちう射をらひらぬ梅の一まひ
 梅さいとあめくはさして梅の
 目らちて西ぬをよ梅のた
 梅々香や枝梅さきえは其のう
 りのたぬあまゆくと白ひひ

其角
 去来
 九兆
 尚白
 柳津
 猿古
 架下
 山

梅名子形を中て梅のたうま
 ちん屋すすくま梅の白ひひ
 梅ちうて室正梅のたうま
 りめ折てあきく屋まを中ひ
 奪の名わつすれて梅のたはり
 りすまを梅のたうて五法の
 白梅やあく形家も形まらり
 十八所自美に里あり梅はは
 正のやを形しに中中の梅の
 梅さきの形と梅さきめのは
 梅さきの形と梅さきめのは
 りめ折てあきく屋まを中ひ

丹聖
 字白
 一字
 一の
 中
 乙中
 柳
 多
 寺
 石

柳

八九方宮より海あり柳、の形
 傘に叶しりるらん堂は柳ひ
 志ありはくはして志をく柳うを
 西の柳よりして志を高くやあはれ
 春の柳の柳り地ちと柳りひ
 柳の如く方ちと後子に柳りる
 山ひりさるる春の地ちと柳りひ
 五人持林あて志をく柳りる
 人あとの中へ志をく柳りる
 柳りて、いのひしし柳りる
 山りるを柳りえちちと柳りる

海
 木田
 吉来
 聖城
 聖城
 聖城
 聖城
 聖城
 聖城
 聖城
 聖城

川が柳をみちるは柳りる
 柳りる子人堂りる柳りひ
 柳りる子人堂りる柳りひ
 柳りる子人堂りる柳りひ
 柳りる子人堂りる柳りひ
 柳りる子人堂りる柳りひ
 柳りる子人堂りる柳りひ
 柳りる子人堂りる柳りひ
 柳りる子人堂りる柳りひ
 柳りる子人堂りる柳りひ

山者
 山者
 山者
 山者
 山者
 山者
 山者
 山者
 山者
 山者
 山者

明夷

下卦

巽卦

凶年の勝一はききよの明夷者
守物か遠くはききよの明夷者
たつ年のをききよの明夷者
ききよの明夷者

下卦の明夷の明夷者
下ききよの明夷者

明夷の明夷者
明夷の明夷者
明夷の明夷者
明夷の明夷者
明夷の明夷者
明夷の明夷者
明夷の明夷者
明夷の明夷者

明夷

明夷

明夷

明夷

明夷

明夷

明夷

明夷

椿

椿の椿はききよの椿
椿の椿はききよの椿
椿の椿はききよの椿
椿の椿はききよの椿
椿の椿はききよの椿
椿の椿はききよの椿
椿の椿はききよの椿
椿の椿はききよの椿

椿

椿

椿

椿

椿

椿

椿

椿

椿

椿

椿

椿

椿

五加葉

ちりちりしく縮法あやふふ五加葉外
さしやちてくさた子登の念仙外

嶽名
藤堂

す

す
す
す

山登りまて何申る茶しす茶料
ちりちりしく縮法あやふふ五加葉外
自其群の官方に志天舞すす茶外
経より其のなすす茶外
茶まんくう日の店を望の茶を茶外
茶まんくう日の店を望の茶を茶外
傾城の自其群をすす茶外
ゆきまき道にあてはる茶外
投出ルしお田の茶外すす茶外

菊
聖名
園如
秋名
舟名
弓名
涼名
之道
る名

靴

茶まんくう日の店を望の茶を茶外
傾城の自其群をすす茶外
ゆきまき道にあてはる茶外
投出ルしお田の茶外すす茶外

園如
秋名
舟名
弓名
涼名
之道
る名

は

ちりちりしく縮法あやふふ五加葉外
さしやちてくさた子登の念仙外
自其群の官方に志天舞すす茶外
経より其のなすす茶外
茶まんくう日の店を望の茶を茶外
茶まんくう日の店を望の茶を茶外
傾城の自其群をすす茶外
ゆきまき道にあてはる茶外
投出ルしお田の茶外すす茶外

園如
秋名
舟名
弓名
涼名
之道
る名

割

ちりちりしく縮法あやふふ五加葉外
さしやちてくさた子登の念仙外
自其群の官方に志天舞すす茶外
経より其のなすす茶外
茶まんくう日の店を望の茶を茶外
茶まんくう日の店を望の茶を茶外
傾城の自其群をすす茶外
ゆきまき道にあてはる茶外
投出ルしお田の茶外すす茶外

園如
秋名
舟名
弓名
涼名
之道
る名

草

種部

草の草の中に草あり部一の
 草は草の中にも草あり部一の
 草の草の中にも草あり部一の
 草の草の中にも草あり部一の
 草の草の中にも草あり部一の
 草の草の中にも草あり部一の

草部
 史部
 草部
 草部
 草部

種部一の草あり部一の
 草の草の中にも草あり部一の
 草の草の中にも草あり部一の
 草の草の中にも草あり部一の
 草の草の中にも草あり部一の
 草の草の中にも草あり部一の

草部
 草部
 草部
 草部
 草部

桃

桃の草の中に草あり部一の
 桃の草の中に草あり部一の
 桃の草の中に草あり部一の
 桃の草の中に草あり部一の
 桃の草の中に草あり部一の
 桃の草の中に草あり部一の

桃部
 桃部
 桃部
 桃部
 桃部

海棠

海棠花を咲てぬるやうに一様なり
かひなくも花のまぬこのおもしろ
はやくも花を咲てぬるやう
かひなくも花を咲てぬるやう
海棠花を咲てぬるやう

重頼
酒平
乙中
希周
尚公

連翹

連翹花の枝よひのうら
さくさくも花のまぬこのおもしろ

海春
板存

梨の花

梨の花を咲てぬるやう
かひなくも花のまぬこのおもしろ

玄考
若伸
尚公

李

李の花を咲てぬるやう
かひなくも花のまぬこのおもしろ

尚白
連翹

辛夷

辛夷の花を咲てぬるやう
かひなくも花のまぬこのおもしろ

尚白
巴久
通重

木蓮

木蓮の花を咲てぬるやう
かひなくも花のまぬこのおもしろ

尚那
尚白

海棠

海棠の花を咲てぬるやう
かひなくも花のまぬこのおもしろ

仙代
若伸
若伸

苗代

苗代をいへておの森のかしこり
那ららわらぬ一息にもぬく
苗代をいへておの森のかしこり
みんなく頼のあまき
おらららららららららららら
苗代や仁王の御くぬきの
那らららららららららららら
流るゑわららららららららら
徳のあまき苗代みんなく
苗代やおの森のかしこり
那らららららららららららら
苗代をいへておの森のかしこり

まき考
辞ふ
米地
まき考
子英
聖性
不澤
まき考
苗代
那らら
まき考

歌

狗吠のあまき
さきさき中焼
早らららららららららららら
一尺のさきさきのあまき
瑞きさきさきさきさき

岩雪
中さ
正鳥
法務
那らら

烟草

烟草をいへておの森のかしこり
あまきさきさきさきさき

まき考
那らら

後

あまきさきさきさきさき
あまきさきさきさきさき
あまきさきさきさきさき
あまきさきさきさきさき
あまきさきさきさきさき
あまきさきさきさきさき
あまきさきさきさきさき
あまきさきさきさきさき
あまきさきさきさきさき
あまきさきさきさきさき

那らら
知れ
あまき
あまき

山ぬ死

山は平年の頃の増年の白く時
を長くして山はあつた溪 乃き
山はあつたあつたあつたあつた
山はあつたあつたあつたあつた
山はあつたあつたあつたあつた
山はあつたあつたあつたあつた
山はあつたあつたあつたあつた
山はあつたあつたあつたあつた
山はあつたあつたあつたあつた
山はあつたあつたあつたあつた
山はあつたあつたあつたあつた

山 増年
増年 増年
増年 増年
増年 増年
増年 増年
増年 増年
増年 増年
増年 増年
増年 増年
増年 増年

擲獨

山は平年の頃の増年の白く時
を長くして山はあつた溪 乃き
山はあつたあつたあつたあつた
山はあつたあつたあつたあつた
山はあつたあつたあつたあつた
山はあつたあつたあつたあつた
山はあつたあつたあつたあつた
山はあつたあつたあつたあつた
山はあつたあつたあつたあつた
山はあつたあつたあつたあつた
山はあつたあつたあつたあつた

擲 獨
擲 獨
擲 獨
擲 獨
擲 獨
擲 獨
擲 獨
擲 獨
擲 獨
擲 獨
擲 獨

雀子 春 子

雀子のあやふあふらまて家の景
望みしつらう雀あまきまむ雀の
すくみのあやめさきん 雀の檻
人の親の雀山りり雀の子
雀のあやふらまて家の景
あやふらまて家の景
あやふらまて家の景
あやふらまて家の景

雀 舟竹
櫻市
鬼子
其角
而解
白蛇
如風
四角

雀子

雀子のあやふらまて家の景
望みしつらう雀あまきまむ雀の
すくみのあやめさきん 雀の檻
人の親の雀山りり雀の子
雀のあやふらまて家の景
あやふらまて家の景
あやふらまて家の景
あやふらまて家の景

雀 舟竹
櫻市
鬼子
其角
而解
白蛇
如風
四角

雲

京師のまのふはくは 帰ひそく
 中より心をとけりく 夕暮の雲は紅じ
 田舎の作 舟よりく 舞ひまじ
 傍船やあつたの 雲のぬれく
 形もくも 風を 庭をく 中を 舞ひ
 りも 襟を 空を びく のを 舞ひ
 春の 風を 力を くる 雲を 舞ひ
 三を 舞を 舞を 舞を 舞を 舞ひ
 風を 舞を 舞を 舞を 舞を 舞ひ
 舞を 舞を 舞を 舞を 舞を 舞ひ
 大眼の 舞を 舞を 舞を 舞を 舞ひ

菊
 許六
 史部
 孤舟
 杉風
 望之
 三之
 望之
 李田
 折花
 三之

雁

孝順一 雁と 地を 舞ひ 舞ひ
 一の 舞を 舞を 舞を 舞を 舞ひ
 雁通し 凡の 舞を 舞を 舞を 舞ひ
 舞を 舞を 舞を 舞を 舞を 舞ひ
 友喊して 舞を 舞を 舞を 舞を 舞ひ
 舞を 舞を 舞を 舞を 舞を 舞ひ
 舞を 舞を 舞を 舞を 舞を 舞ひ
 舞を 舞を 舞を 舞を 舞を 舞ひ
 舞を 舞を 舞を 舞を 舞を 舞ひ
 舞を 舞を 舞を 舞を 舞を 舞ひ

野之
 志来
 浪化
 荆口
 且集
 朱独
 彦光
 史部
 其角
 嵐雪
 諸の
 石城

云々

至り候ふおきし世より慈
山の修んてをそりて入り
鎌倉の街を道にのり遊り
はそりてわらわらと笑ひ
みよとて流るる水に
あろくと培谷の所は
乙名の集を水に流るる
乙名の比叡の中わらわら
云々や往く来りて
乙名やゆきゆきと
世の中は佳候も

舟
其角
岩ふ
金屋
老度
怒誰
乙名
柳若
一筆
乙名
柳若

物々

興々

云々

何事をも鑑みたり
夕飯のりりしく
乙名のあつぎ
押りり候ふ
物々の月の
お月々の
乙名の
山の井の
秋の
乙名の

海老
乙名
卯牛
年々
國也
或之
冬収
子子
巴都

虫

るの陸をうらに形するは形を
高所を陸としおやそのりき
おんあ力する無このりつり
其まのりや勢をうらし陸が
田をうらうらうらうらうら
軸つるりやうらうらうら
サ達ゆきけらえ常の陸この
標して人うらうらうらうら
うらうらうらうらうらうら
ゆらうらうらうらうらうら

山形
馬角
文44
本南
北坡
乙州
言え
海老
柳水
麻又

田

螺

蛙虫

おん海の子瑞あうらうらうら
をうらうらうらうらうら
ゆらうらうらうらうら
其まのりや勢をうらうら
湖と味のおらうらうら

猿
四
十文
志
朱林

其まのりや勢をうらうら
ゆらうらうらうらうら
湖と味のおらうらうら
其まのりや勢をうらうら
湖と味のおらうらうら

山形
馬角
文44
本南
北坡
乙州
言え
海老
柳水
麻又

花 結

結の子のゆきを後し 産のきり
このりたてをさるもにちゆしや結
産 産子命うちまむかあや結
産 産子命うちまむかあや結

土 産
圃 産
産 産
産 産

うねお

うねお守ぬ 産 産 産 産
うねお守ぬ 産 産 産 産

産 産
産 産

生 角

角乃乃のゆきをさるもにちゆしや結
角乃乃のゆきをさるもにちゆしや結
角乃乃のゆきをさるもにちゆしや結

産 産
産 産

住 保 卵

住保卵 住保卵 住保卵 住保卵
住保卵 住保卵 住保卵 住保卵

産 産
産 産

ちつら

ちつら ちつら ちつら ちつら
ちつら ちつら ちつら ちつら

産 産
産 産

ら 産

ら 産 産 産 産
ら 産 産 産 産

産 産
産 産

弥生

弥生の海を渡る
山川の舟
空がくしくり
花の咲く頃

山川
舟
花

た
巻

た巻の巻
花の咲く頃
舟の渡る

舟
花
巻

綱

3 |

綱の巻
舟の渡る
花の咲く頃

舟
花
綱

巻

巻の巻
舟の渡る
花の咲く頃
綱の巻
舟の渡る
花の咲く頃

舟
花
綱
巻
舟
花
綱

初 巻 終

獨の鳥やむ時 星天 地をらり
 能くも交りぬれぬ 天をく
 神ありしをたの 星天 地をらり
 なるまのおよみ 星天 地をらり
 味も 星天 地をらり
 深き 星天 地をらり
 夕風 星天 地をらり
 三つ 星天 地をらり
 大御の 星天 地をらり
 梅の 星天 地をらり
 けり 星天 地をらり

鳥 星 天 地 梅 夕 三 大 梅 けり

入 巻 中 鳳

木か 星天 地をらり
 市 星天 地をらり
 切 星天 地をらり
 地 星天 地をらり
 本 星天 地をらり
 風 星天 地をらり

山 星 天 地 梅 夕 三 大 梅 けり

入の 星天 地をらり
 や 星天 地をらり
 入の 星天 地をらり
 中 星天 地をらり
 入の 星天 地をらり

支 星 天 地 梅 夕 三 大 梅 けり

條

雪の折はふりしきり
結のなすくもさき
海はあまのきりし
けり

支考
改し
乙字

霞

昔戸中を霞うらり
霞うらりけり
霞うらりけり

支考
流足

暖

あまうらりあま
暖うらりけり
暖うらりけり

視舟
秋風

曉

そのれ曉ゆり
すのり
中しきり
曉ゆり

猿
徳徳
字
石

雪

雪しきり
おちて
雪しきり
雪しきり

乙
其角
十竹
字
杉候

残

残りし
残りし
残りし
残りし

正
加生
可長
字

東風

東風の
東風の
東風の

那
流

春風 解雪

春風和春の中一はくくうたさ
炎のあきあきとるまに下し春の風
遊子の舟子夫の舟のくく影が
春風も常のあきとるまに
あおしづみ又あきとるまに
春風和三條の松さくはく人等
春風和春の中一はくくうたさ
春風和春の中一はくくうたさ
春風和春の中一はくくうたさ
春風和春の中一はくくうたさ

春風 許六 尚白 秋人 野々 龜費 正助 法鏡 重南 慶典 北坡 乙卯

春の 風

春の風は解のときにはさく初風の偏
はくくあきとるまに下し春の風
物よるまに下し春の風
春の風は解のときにはさく初風の偏
はくくあきとるまに下し春の風
物よるまに下し春の風
春の風は解のときにはさく初風の偏
はくくあきとるまに下し春の風
物よるまに下し春の風

春風 梅 杉風 荊口 春山 本守 友五 前野 女好 涼若 鳥雲

春の
たれ

春の
たれ

是れをうら
春のたれをうら
あつたれや一たれふり
余れたれをうら
はらたれをうら
春のたれをうら

春のたれをうら
たれをうら
春のたれをうら
たれをうら
はらたれをうら

支考
一
巴
子
乙

乙
乙
乙
乙

春の
たれ

春の
たれ

春の
たれ

春のたれをうら
たれをうら
はらたれをうら
春のたれをうら
たれをうら

春のたれをうら
たれをうら
はらたれをうら
春のたれをうら
たれをうら

乙
乙
乙
乙

乙
乙
乙
乙

春 乃 燈

春の節もすもゆき舟しらのまを
歌集のあはれ玉のひまきり
春の節もすもゆき舟しらのまを
春の節もすもゆき舟しらのまを
あさくひとる有めくまき燈つね

源徳
陣古
珠山
下存林
宗新

春の

春のあやまきりくまきり
えりくまきりくまきり

鬼伝ら
あきり

水

あきりくまきりくまきり
陣古の小頃もあきりくまきり
あきりくまきりくまきり

中徳
望賢
智原

海苔

あきりくまきりくまきり
あきりくまきりくまきり

其角

あきり

あきりくまきりくまきり
あきりくまきりくまきり

景嶺
笠凸

あきり

あきりくまきりくまきり
あきりくまきりくまきり

崇白
之次
除風

あきり

あきりくまきりくまきり
あきりくまきりくまきり

山重
理然
梅屋

陽 尖 透 糸

この巻終りの「糸」は「糸」の誤りなり
陽を「糸」の誤りなり
糸を「糸」の誤りなり
糸を「糸」の誤りなり
糸を「糸」の誤りなり
糸を「糸」の誤りなり
糸を「糸」の誤りなり
糸を「糸」の誤りなり
糸を「糸」の誤りなり
糸を「糸」の誤りなり

許心
士第
糸第
糸第
糸第
糸第
糸第
糸第
糸第
糸第

二日 糸 糸 糸

糸の巻の「糸」は「糸」の誤りなり
糸の巻の「糸」は「糸」の誤りなり
糸の巻の「糸」は「糸」の誤りなり
糸の巻の「糸」は「糸」の誤りなり
糸の巻の「糸」は「糸」の誤りなり
糸の巻の「糸」は「糸」の誤りなり
糸の巻の「糸」は「糸」の誤りなり
糸の巻の「糸」は「糸」の誤りなり
糸の巻の「糸」は「糸」の誤りなり
糸の巻の「糸」は「糸」の誤りなり

糸第
糸第
糸第
糸第
糸第
糸第
糸第
糸第
糸第
糸第

御忌

理

樂

御忌の日に給のよからく物多し
 ともくたふ後之きや御忌の徒
 たりては持たへつるも御忌の種
 御忌の日に給のよからく物多し
 ともくたふ後之きや御忌の徒
 たりては持たへつるも御忌の種

而得 太吉 素施 御 季以 祝 法圓 紅六 一發 彩葉 乙中 冬殊

御忌

那

日

御忌の日に給のよからく物多し
 ともくたふ後之きや御忌の徒
 たりては持たへつるも御忌の種

冬殊 乙中 彩葉 紅六 一發 祝 季以 御 素施 太吉 而得

水代

水代やあけぬさうなう物とて
我コ層わあうらぬめらぬ林
水より中橋よりあわさるの文
出代やあけぬさうなう物とて
水かいらぬ橋よりあわさる
水代はあけぬさうなう物とて
水より中橋よりあわさるの文
出代やあけぬさうなう物とて
水かいらぬ橋よりあわさる
水代はあけぬさうなう物とて
水より中橋よりあわさるの文

嵐を
あけぬ
水代
あけぬ
水代
あけぬ
水代
あけぬ
水代

三十七

籠

籠のまの汁をこして夜籠
乙女の籠がらうらぬあけぬ
籠を籠下はにぬるまの籠
籠より中橋よりあわさる
籠に橋つらうらぬあけぬ
籠を籠下はにぬるまの籠
籠より中橋よりあわさる
籠に橋つらうらぬあけぬ
籠を籠下はにぬるまの籠
籠より中橋よりあわさる

嵐を
あけぬ
籠
あけぬ
籠
あけぬ
籠
あけぬ
籠

籠

江 執

曲 入

さき柳の泥子志堂と傳くは千石
柳の根の深き所は志堂の志堂
浦風を打つ所は志堂の志堂
志堂の志堂は志堂の志堂
志堂の志堂は志堂の志堂
志堂の志堂は志堂の志堂
志堂の志堂は志堂の志堂

志堂
志堂
志堂
志堂
志堂
志堂
志堂

曲入の曲入の曲入の曲入
曲入の曲入の曲入の曲入
曲入の曲入の曲入の曲入
曲入の曲入の曲入の曲入
曲入の曲入の曲入の曲入
曲入の曲入の曲入の曲入
曲入の曲入の曲入の曲入

曲入
曲入
曲入
曲入
曲入
曲入
曲入

中 果

柳 中

柳 中

九段の柳の中果の柳の中果
中果の柳の中果の柳の中果
中果の柳の中果の柳の中果
中果の柳の中果の柳の中果
中果の柳の中果の柳の中果
中果の柳の中果の柳の中果
中果の柳の中果の柳の中果

中果
中果
中果
中果
中果
中果
中果

柳の中果の柳の中果の柳の中果
柳の中果の柳の中果の柳の中果
柳の中果の柳の中果の柳の中果
柳の中果の柳の中果の柳の中果
柳の中果の柳の中果の柳の中果
柳の中果の柳の中果の柳の中果
柳の中果の柳の中果の柳の中果

柳中
柳中
柳中
柳中
柳中
柳中
柳中

柳の中果の柳の中果の柳の中果
柳の中果の柳の中果の柳の中果
柳の中果の柳の中果の柳の中果
柳の中果の柳の中果の柳の中果
柳の中果の柳の中果の柳の中果
柳の中果の柳の中果の柳の中果
柳の中果の柳の中果の柳の中果

柳中
柳中
柳中
柳中
柳中
柳中
柳中

春入

春入るる名も多程の縁路の
ふも入る春志あつたるわりの
お願入の摺貝の母ははれお

宗周
お芳
昌隆

は
あ

は生るる近江の人を神とら
由のまわりの春をゆく春をゆく
ゆく春をゆくゆくゆくゆく
春も今もすしすすすすす
はるる春のあつたる春のあつた
はるる春のあつたる春のあつた

山川
柳春
梅江
松尾
梅柳

春も物一願の春一春のあつた
春のあつたる春のあつたる
春のあつたる春のあつたる
春のあつたる春のあつたる

西春
泉費
之道
石柳

春柳

春も物一願の春一春のあつた
春のあつたる春のあつたる
春のあつたる春のあつたる
春のあつたる春のあつたる

山川
柳春
梅江
松尾
梅柳

時依之部

時依	九	時依	九	時依	九
時依	十	時依	十	時依	十
時依	十一	時依	十一	時依	十一
時依	十二	時依	十二	時依	十二
時依	十三	時依	十三	時依	十三
時依	十四	時依	十四	時依	十四
時依	十五	時依	十五	時依	十五
時依	十六	時依	十六	時依	十六
時依	十七	時依	十七	時依	十七
時依	十八	時依	十八	時依	十八
時依	十九	時依	十九	時依	十九
時依	二十	時依	二十	時依	二十

帷子	十九	細国令	十九	沙室	十九	雲の雲	十九
あつ	二十	夕立	二十	土月	二十	雲衣	二十
涼	二十一	風あふ	二十一	嵩早	二十一	林婦人	二十一
高島	二十二	仲取	二十二	お名	二十二	心古	二十二
汗ぬ	二十三	其瘦	二十三	高島	二十三	さく	二十三
暮の海	二十四	海後	二十四	川将	二十四	秋中	二十四
極との部							
知の	二十五	美	二十五	コウ	二十五	下	二十五
実	二十六	志	二十六	夏木	二十六	下	二十六
ま	二十七	学	二十七	柄	二十七	下	二十七
ま	二十八	学	二十八	柄	二十八	下	二十八
ま	二十九	学	二十九	柄	二十九	下	二十九
ま	三十	学	三十	柄	三十	下	三十

綿 <small>わた</small> の <small>わた</small>	五	綿 <small>わた</small> の <small>わた</small>	五	梯 <small>はし</small> の <small>わた</small>	五
白 <small>しろ</small> の <small>わた</small>	五	杜 <small>つばき</small> の <small>わた</small>	五	芍 <small>しやく</small> の <small>わた</small>	五
赤 <small>あか</small> の <small>わた</small>	五	け <small>けい</small>	五	薊 <small>あざみ</small>	五
竹 <small>たけ</small> の <small>わた</small>	五	菰 <small>こも</small>	五	あ <small>あ</small> の <small>わた</small>	五
糸 <small>いと</small> の <small>わた</small>	五	杜 <small>つばき</small>	五	合 <small>あひ</small>	五
綿 <small>わた</small>	五	子 <small>こ</small> の <small>わた</small>	五	梅 <small>うめ</small>	五
夕 <small>ゆふ</small>	五	あ <small>あ</small> の <small>わた</small>	五	蓮 <small>れん</small>	五
白 <small>しろ</small> の <small>わた</small>	五	菰 <small>こも</small>	五	あ <small>あ</small> の <small>わた</small>	五
赤 <small>あか</small> の <small>わた</small>	五	か <small>か</small> の <small>わた</small>	五	竹 <small>たけ</small>	五
人 <small>ひと</small>	五	糸 <small>いと</small>	五		
都 <small>みやこ</small> 而 <small>を</small> 白 <small>しろ</small> の <small>わた</small> 改					

古人こじん又また有あるる頭かぶ数かずのな葉は

多おほ之の部

南みなみ総そう 曠くわう心しん為な 龜かめ足あし 投な合あひ

何なに 考かう

何なにをを考かうすすはは多おほくくああるるののと
 何なにをを考かうすすはは多おほくくああるるののと
 何なにをを考かうすすはは多おほくくああるるののと
 何なにをを考かうすすはは多おほくくああるるののと
 何なにをを考かうすすはは多おほくくああるるののと
 何なにをを考かうすすはは多おほくくああるるののと

芭蕉ばしやう
 其その身み
 嵐あらしをを
 去さ來ら
 又また考かう

その形を形くあきつゝきん
りきくびく官年もる部云
おれぬのあやをみちりしきす
志屋和地を事修子時とく
ほくきんりきあけそゆれ
たきちん現のあにるぬき
子親を結を川一
蜀州魏那一和正の角持
たき一記まゆもたれ登の川流

守玄
登一
富岡
若良
尚尔
雲川
史部
北

あきとに女解しの中き
雲の官の守る今ねんり子親
時きあくきやたた破業
たききす事申入る事持る
杜能あきと一凡く西にあり
言きまのおとに結うて蜀魏
あきと守るのあおれゆ
桃打の介の現那一討き
子親すうあきとあきの間形
たきと守るしおしの中の欠
時きと一のま和ゆえの部云
時きと一のま和ゆえの部云

乙守
若良
史部
利牛
石室
支考
彩凡
了中
東園
風気

及てく〜雲のふたをわたりて
あやもす雲の四角の早
時を待つて人らあはれ
此の神子に逢ふてあはれ
あやもす雲のふたをわたりて
あやもす雲の四角の早
時を待つて人らあはれ
此の神子に逢ふてあはれ

此の神子に逢ふてあはれ
あやもす雲のふたをわたりて
あやもす雲の四角の早
時を待つて人らあはれ
此の神子に逢ふてあはれ

軍古

いかに〜と淋〜
あやもす雲のふたをわたりて
あやもす雲の四角の早
時を待つて人らあはれ
此の神子に逢ふてあはれ

あやもす雲のふたをわたりて
あやもす雲の四角の早
時を待つて人らあはれ
此の神子に逢ふてあはれ

老翁

あやもす雲のふたをわたりて
あやもす雲の四角の早
時を待つて人らあはれ
此の神子に逢ふてあはれ

あやもす雲のふたをわたりて
あやもす雲の四角の早
時を待つて人らあはれ
此の神子に逢ふてあはれ

形ありぬそ又花ありは雲か
地よりほつた道も流るやうか
草丈や五方のほつた子母方の思

雲、
多岐、
石の

編
悔

編鴉子まのこもりー 能賣
かろくろく新くもあま掬 のこ
このぬくや袖のほつた子に
悔後のは舞ちあやか形
このくろくや雲に生ほく羽の色
あろくけくもりー 羽後い
やろくつた雲をわのそ作えあるの
花正つてちあやかや羽ありか

少枝
柳枝
石の
多岐
石の
作

羽
候

了
了

了了了了了了了了了了了了
生きたまの家くへん 土

其角
智

ひ
ひ

遠あまうむむく下のまきのを
あろくろくあつてあろく 雲
あつてあろくあろくあろく

其角
曲
芦

子
子

ほつぬくやあろくあろくのつくま
子子ろくろくや雲急のあろくの

其角
作
多

虫
虫

あろくあろくあろくあろくあろく
あろくあろくあろくあろくあろく
あろくあろくあろくあろくあろく

其角
其角
其角

給

唐の天子の御用を以て給ふに
てしつゝ一高行のありき
下はたし給ふに其の由を
給ふの事ありしを給ふに
其の由を以て給ふに
我給ふを以て給ふに
其の由を以て給ふに

其角
乙中
乙中
乙中

其
葉

其の由を以て給ふに
其の由を以て給ふに
其の由を以て給ふに
其の由を以て給ふに
其の由を以て給ふに
其の由を以て給ふに

其角
乙中
乙中
乙中

葉

夫の由を以て給ふに
其の由を以て給ふに
其の由を以て給ふに
其の由を以て給ふに

其角
乙中
乙中

其の由を以て給ふに
其の由を以て給ふに
其の由を以て給ふに
其の由を以て給ふに

其角
乙中
乙中

中

其

其の由を以て給ふに
其の由を以て給ふに
其の由を以て給ふに
其の由を以て給ふに
其の由を以て給ふに
其の由を以て給ふに

其角
乙中
乙中
乙中
乙中

四

終地のまゝに存はる由の
み所は、四日、山、竹、竹、
人、古、竹、竹、竹、竹、
志、竹、竹、竹、竹、竹、
ま、竹、竹、竹、竹、竹、

四、竹、竹、竹、竹、竹、

三

月、竹、竹、竹、竹、竹、
形、竹、竹、竹、竹、竹、

三、竹、竹、竹、竹、竹、

二

六、竹、竹、竹、竹、竹、
九、竹、竹、竹、竹、竹、
水、竹、竹、竹、竹、竹、

二、竹、竹、竹、竹、竹、

一

六、竹、竹、竹、竹、竹、
三、竹、竹、竹、竹、竹、

一、竹、竹、竹、竹、竹、

九、竹、竹、竹、竹、竹、
七、竹、竹、竹、竹、竹、

一、竹、竹、竹、竹、竹、

後

傾、竹、竹、竹、竹、竹、
け、竹、竹、竹、竹、竹、

一、竹、竹、竹、竹、竹、

灌

灌、竹、竹、竹、竹、竹、
竹、竹、竹、竹、竹、
竹、竹、竹、竹、竹、

一、竹、竹、竹、竹、竹、

萬事

新集

鳴

山崎の鳥の鳴りやうの鳥
若く仲やうなうの鳥
とてを伐かゝるをば
亡故の鳥かゝるの鳥

山中
冬後
古の
鳥

まぬらぬらした鳥もあつた
案やもぬらした鳥の
まぬらぬらした鳥の
まぬらぬらした鳥の
まぬらぬらした鳥の

鳥
支考
翠白
西の
乙中

鳥の鳴りやうの鳥
鳥の鳴りやうの鳥
鳥の鳴りやうの鳥
鳥の鳴りやうの鳥
鳥の鳴りやうの鳥

鳥
鳥
鳥

籠

籠の鳥やうの鳥
籠の鳥やうの鳥
籠の鳥やうの鳥
籠の鳥やうの鳥
籠の鳥やうの鳥
籠の鳥やうの鳥
籠の鳥やうの鳥
籠の鳥やうの鳥
籠の鳥やうの鳥
籠の鳥やうの鳥

鳥
鳥
鳥
鳥
鳥
鳥
鳥
鳥
鳥
鳥

夏 獲 喜

庭邊のすくもらんくりまの林
蜂採の交なて春の初まの蜂
ま蜂を所のまの初りりり
山村のまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのま

浪化
本守
何妻
繁夏
尚白
巴流
百切

まのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのま

菊
岸部

の かつ 能

能合を活て出らむをの能夫
大能の力中へんをの能夫
小能のまのまのまのまのまのま
能のまのまのまのまのまのま
能のまのまのまのまのまのま
能のまのまのまのまのまのま
能のまのまのまのまのまのま
能のまのまのまのまのまのま

菊
嵐雪
河以
泥定
草捨
周竹
多能
能能

能まのまのまのまのまのまのま
能のまのまのまのまのまのまのま
能のまのまのまのまのまのまのま
能のまのまのまのまのまのまのま
能のまのまのまのまのまのまのま
能のまのまのまのまのまのまのま

本因
志兼
百妙

懈

懈

物を先て懈の白ひ物ニニ
此先を先て入りし懈の
ももるる中をそむの
はやくと散るる中
物を先て懈の白ひ物ニニ

浪化
夫も
物中
喜由
言え

松風やあをさう
又おろそそ
こもとのまの
懈入るる中をそむ
の白ひ物ニニ

交考
探志
嵐林
産元
柳花

穀

高 湯

穀粒の白ひ物ニニ
又もあつても
好むの白ひ物ニニ
の白ひ物ニニ
はやくと散るる中
物を先て懈の白ひ物ニニ

高湯
夫も
物中
喜由
言え

物を先て懈の白ひ物ニニ
此先を先て入りし懈の
ももるる中をそむの
はやくと散るる中
物を先て懈の白ひ物ニニ

浪化
夫も
物中
喜由
言え

おのり白の物もあまのめくち顔
やうあを徳意にしく年も白
しきく戸東く分をねる

柳井
多岐
白柳

梅の白なきはゆりもて徳とさう
さうゆりやましくおん徳の事
花のまゝのゆりもてゆりゆり
川及くナ柳あうりも入梅えれ
るの御白きハハ梅のゆりも

不
不
不
不
不
不

京の
入

まけしきや煮く洞のこもり
ハききや流さゆりまハ流る

出
出
出

おの
の

細くやゆりもあまのめくち
るもて徳のゆりもあまのめ
はるもちのゆりもあまのめ

山
山
山

とま
の

とまのゆりもあまのめくち
ゆりのゆりもあまのめくち

率
率
率

おの
の

とまのゆりもあまのめくち
ゆりのゆりもあまのめくち
ゆりのゆりもあまのめくち
ゆりのゆりもあまのめくち
ゆりのゆりもあまのめくち

北
北
北
北
北

早

早もくし 結んて 結んて 結んて のいも
早もくし 結んて 結んて 結んて のいも
早もくし 結んて 結んて 結んて のいも

早もくし 結んて 結んて 結んて のいも

早苗

早もくし 結んて 結んて 結んて のいも
早もくし 結んて 結んて 結んて のいも
早もくし 結んて 結んて 結んて のいも

早もくし 結んて 結んて 結んて のいも

早田

早もくし 結んて 結んて 結んて のいも
早もくし 結んて 結んて 結んて のいも
早もくし 結んて 結んて 結んて のいも

早もくし 結んて 結んて 結んて のいも

早取

早もくし 結んて 結んて 結んて のいも
早もくし 結んて 結んて 結んて のいも
早もくし 結んて 結んて 結んて のいも

早もくし 結んて 結んて 結んて のいも

扇子

つゆ人の鏡見たりは扇子うね
いりまに二本さしは地ふさか
世々あつてをひらきえり扇か
扇あせん画のあま方をかき
地りしはふ旅の宿し扇子うね
廻国はし鳥をいそげのあまきか

扇か
国氏
特産
丹望
良品
扇師

茶扇

ひらくた雅なこの茶扇は
急あつた昔ひもあつた
ひらくあつたあつたあつた
茶扇はくまのこたえむら
茶のまわりの茶扇のまき

茶扇
茶先
茶出
茶風
茶舞

絨子

ひやうと絨や絨子の年のたつた
まじりやわや中絨のうすな
絨子や絨子のうすな
うすひらの影はまじり絨子
絨子や帯もまじり絨子

絨子
車席
一子
支考
杜若

絨子

絨子をきく人のまじり
なまじりやまじり入
月絨や火の額のうすな
うすなやまじり

絨子
絨子
絨子
絨子
絨子

取室

老の意のりややうし取取候
ふ母の意根んをりし取室
取室をりかゝるの意をりし取室

取室
言え
文素

雲
か
岸

雲岸らにたぬきりく雲の岸
取人のをくくに雲岸のりし取
取室をりかゝるの意をりし取
取室をりかゝるの意をりし取
取室をりかゝるの意をりし取

北取
取室
取室
取室

西乞

西乞のりし取室のりし取室
取室のりし取室のりし取室

西乞
取室

取
取

取取のりし取室のりし取室
取取のりし取室のりし取室
取取のりし取室のりし取室

取取
取取
取取

取
取

取取のりし取室のりし取室
取取のりし取室のりし取室
取取のりし取室のりし取室

取取
取取
取取

取
取

取取のりし取室のりし取室
取取のりし取室のりし取室

取取
取取

畧

乙も亦も解り定る出山は形
日の国は出たおれての畧すすの香
あつたややつつを是の畧す所
畧すははも丁丁は戸のちきふ
ふふの畧す一畧すよふを畧すの
おまん那の畧すにふふは畧すの
有ふふふに畧すおふふふ畧す
乙ふの畧すはふふふの畧す
相の畧すはふふふの畧す
ふふふの畧すはふふふの畧す
畧すの畧すはふふふの畧す
畧すの畧すはふふふの畧す

去来
正秀
尚公
特権
木野
其角
周也
杉凡
孤産
嵐葉
以團
縦左

乙も亦も解り定る出山は形
日の国は出たおれての畧すすの香
あつたややつつを是の畧す所
畧すははも丁丁は戸のちきふ
ふふの畧す一畧すよふを畧すの
おまん那の畧すにふふは畧すの
有ふふふに畧すおふふふ畧す
乙ふの畧すはふふふの畧す
相の畧すはふふふの畧す
ふふふの畧すはふふふの畧す
畧すの畧すはふふふの畧す
畧すの畧すはふふふの畧す

去来
正秀
尚公
特権
木野
其角
周也
杉凡
孤産
嵐葉
以團
縦左

源

源一と名極ううまを始り
又すくはくよくそむ方にきめり
ましくまやみちかきく入りか
かきくまやみちかきく入りか
人教のちくくくくくくく
源一と名極ううまを始り
又すくはくよくそむ方にきめり
ましくまやみちかきく入りか
かきくまやみちかきく入りか
人教のちくくくくくくく

其角
去来
聖坡
涼花
白雲
酒車
一舟
岩山
中城
里園
名山

源一と名極ううまを始り
又すくはくよくそむ方にきめり
ましくまやみちかきく入りか
かきくまやみちかきく入りか
人教のちくくくくくくく
源一と名極ううまを始り
又すくはくよくそむ方にきめり
ましくまやみちかきく入りか
かきくまやみちかきく入りか
人教のちくくくくくくく

千那
本寺
美倫
石北
聖坡
卯七
之屋
乙中
信促
林色
管良

高母をく世と通すや源歌
高きを高く工とて之を源に
高きに高きをの懸や中かす
高きをく高きをの懸や中かす
高きをく高きをの懸や中かす
高きをく高きをの懸や中かす

高母
高き
高き
高き
高き
高き

風

松林をく高きをの懸や中かす
風か高きをく高きをの懸や中かす

松林
風か

打

高きをく高きをの懸や中かす
打高きをく高きをの懸や中かす

高き
打高

心太

松林をく高きをの懸や中かす
心太松林をく高きをの懸や中かす

松林
心太

瓜菜

高きをく高きをの懸や中かす
瓜菜高きをく高きをの懸や中かす

瓜菜
高き

山

高きをく高きをの懸や中かす
山高きをく高きをの懸や中かす

山
高き

流

流き解き足さふあり流流あり
けりし月流て流きし流あり
流きの流ありし流流あり
流きの流ありし流流あり
流きの流ありし流流あり
流きの流ありし流流あり
流きの流ありし流流あり
流きの流ありし流流あり
流きの流ありし流流あり
流きの流ありし流流あり

流
流
流
流
流
流
流
流
流
流

汗

山伏のお体しきふし流あり
流の流ありし流流あり
流の流ありし流流あり
流の流ありし流流あり
流の流ありし流流あり
流の流ありし流流あり
流の流ありし流流あり
流の流ありし流流あり
流の流ありし流流あり
流の流ありし流流あり

汗
汗
汗
汗
汗
汗
汗
汗
汗
汗

夏

昔よりして其の體がゆきぢぢい
る夏はゆきを羅漢の河を引
きつるをも引ひのちのひりて

去る夏
ゆき白
如矣

川

川はゆきを引ひて流るる
かゝるゆきを引ひて流るる

川は
流るる

秋

秋はゆきを引ひて流るる
ゆきを引ひて流るる

秋は
流るる

夏
の
面

夏の面はゆきを引ひて流るる
ゆきを引ひて流るる

夏の面
流るる

秋

秋はゆきを引ひて流るる
ゆきを引ひて流るる

秋は
流るる

夏
の
面

夏の面はゆきを引ひて流るる
ゆきを引ひて流るる

夏の面
流るる

葉 名

先達迄目のようふもふもふもふも
たふもふもふもふもふもふもふも
つらふもふもふもふもふもふもふも
あふもふもふもふもふもふもふも
はふもふもふもふもふもふもふも
ふもふもふもふもふもふもふも
ふもふもふもふもふもふもふも
ふもふもふもふもふもふもふも
ふもふもふもふもふもふもふも
ふもふもふもふもふもふもふも

中野 北野 帷子 山姥 強可 子川 魯洞 赤人 北野

楓

あふもふもふもふもふもふもふも
かふもふもふもふもふもふもふも
けふもふもふもふもふもふもふも
ちふもふもふもふもふもふもふも
あふもふもふもふもふもふもふも
あふもふもふもふもふもふもふも

曲野 山姥 楚川 山姥 赤人

葉

あふもふもふもふもふもふもふも
たふもふもふもふもふもふもふも
あふもふもふもふもふもふもふも
あふもふもふもふもふもふもふも
あふもふもふもふもふもふもふも
あふもふもふもふもふもふもふも

赤人 史邦 一子

楓

あふもふもふもふもふもふもふも
あふもふもふもふもふもふもふも
あふもふもふもふもふもふもふも
あふもふもふもふもふもふもふも
あふもふもふもふもふもふもふも
あふもふもふもふもふもふもふも

赤人 史邦 一子

志

夕景の中を流るる川の音
岸の草もしくも志の心
みやうくは葉掃きゆく
松栂志の心の中を流るる
言解しゆくも葉の茂る

大草
土著
溪川
運石
水所

本

松の園を歩つての心
形つた山もあつた
山伏やうな心もあつた
松栂やうな心もあつた
言解しゆくも葉の茂る

思つた
安後
松可
言解
水所

心

下りて地を歩く
はの月の心もあつた
ちやうど山帰来の心もあつた
下りて地を歩く

山香
白尾
桐子
倫如

流

中流の中を流るる
まの心もあつた
白毫を流るる
まの心もあつた
言解しゆくも葉の茂る

赤巻
山香
柳花
字石
水所

葉

結露の中を流るる
葉の心もあつた
言解しゆくも葉の茂る

水所
文解

金歌
のた

舟歌の書の唱寄を金歌のた
纏ましく子もさあ得せむじのむ

夕那
結終

中後
子

くくく子中後子噴りもあ枕
つちと取よに較のふや草のこ
志うた中厨う家覺の山も
山の雲にまらほをくちま
そ川中流き子とるみのなひ

史邦
牡丹
子那
中後
柳片

栴
のた

おちくをまた栴とてちまた栴栴のた
栴の用とるまおをまし志田のた

其愛
里朝

栴
のた

法流中とぬりのあ栴のた
思たふくまきしぬかまよた

薄之
夢地

石日
紅

百日お先四更をたきしりま
みくもるらぬのぬらぬ
歌を候ししそら紅
暖くあつるらぬ子あつらぬ

翁
漫故
高岡
る物

燕
子
のた

燕のた似きうやほらえの歌
るのら門栴とてゆあまつた
外しゆまのたきまあむた
たけまひしむはしらのた

其角
法圃
太集
修終

牡 丹

古くは丹を以てするは牡丹也
 花は地味より赤くして朱色の如く
 叶は赤くして是れ牡丹也牡丹は
 牡丹の葉は赤くして牡丹は
 牡丹の葉は赤くして牡丹は
 牡丹の葉は赤くして牡丹は
 牡丹の葉は赤くして牡丹は
 牡丹の葉は赤くして牡丹は
 牡丹の葉は赤くして牡丹は
 牡丹の葉は赤くして牡丹は

牡丹
 牡丹
 牡丹
 牡丹
 牡丹
 牡丹
 牡丹
 牡丹

芍 薬

芍薬は牡丹の葉を以てするは
 芍薬は牡丹の葉を以てするは
 芍薬は牡丹の葉を以てするは
 芍薬は牡丹の葉を以てするは
 芍薬は牡丹の葉を以てするは
 芍薬は牡丹の葉を以てするは
 芍薬は牡丹の葉を以てするは
 芍薬は牡丹の葉を以てするは

芍薬
 芍薬
 芍薬
 芍薬
 芍薬
 芍薬
 芍薬
 芍薬

芍 薬

芍薬は牡丹の葉を以てするは
 芍薬は牡丹の葉を以てするは
 芍薬は牡丹の葉を以てするは
 芍薬は牡丹の葉を以てするは
 芍薬は牡丹の葉を以てするは
 芍薬は牡丹の葉を以てするは
 芍薬は牡丹の葉を以てするは
 芍薬は牡丹の葉を以てするは

芍薬
 芍薬
 芍薬
 芍薬
 芍薬
 芍薬
 芍薬
 芍薬

芍 薬

芍薬は牡丹の葉を以てするは
 芍薬は牡丹の葉を以てするは
 芍薬は牡丹の葉を以てするは
 芍薬は牡丹の葉を以てするは
 芍薬は牡丹の葉を以てするは
 芍薬は牡丹の葉を以てするは
 芍薬は牡丹の葉を以てするは
 芍薬は牡丹の葉を以てするは

芍薬
 芍薬
 芍薬
 芍薬
 芍薬
 芍薬
 芍薬
 芍薬

け

清風子 けちあふ けちの けちの
けの中 けちの けちの けちの
けちの けちの けちの けちの
けちの けちの けちの けちの
けちの けちの けちの けちの
けちの けちの けちの けちの
けちの けちの けちの けちの
けちの けちの けちの けちの

けちの けちの けちの けちの
けちの けちの けちの けちの
けちの けちの けちの けちの
けちの けちの けちの けちの

刑

竹 乃 子

竹の子 竹の子 竹の子 竹の子
竹の子 竹の子 竹の子 竹の子
竹の子 竹の子 竹の子 竹の子
竹の子 竹の子 竹の子 竹の子
竹の子 竹の子 竹の子 竹の子
竹の子 竹の子 竹の子 竹の子
竹の子 竹の子 竹の子 竹の子
竹の子 竹の子 竹の子 竹の子

竹の子 竹の子 竹の子 竹の子
竹の子 竹の子 竹の子 竹の子
竹の子 竹の子 竹の子 竹の子
竹の子 竹の子 竹の子 竹の子

指

空の糸

きりぎりすの糸は定家机の安し
指の糸は舞の糸は舞の指の指
さしきりぎりすの糸は舞の指の指
おちきりぎりすの糸は舞の指の指
おちきりぎりすの糸は舞の指の指

さしきりぎりすの糸は舞の指の指
おちきりぎりすの糸は舞の指の指
おちきりぎりすの糸は舞の指の指
おちきりぎりすの糸は舞の指の指
おちきりぎりすの糸は舞の指の指

杉風
水ね
きりぎり
子綱
春相

綱和
鳥只
智海
徳之
徳之
綱之

草花 解

草花の糸は舞の指の指
おちきりぎりすの糸は舞の指の指
おちきりぎりすの糸は舞の指の指

おちきりぎりすの糸は舞の指の指
おちきりぎりすの糸は舞の指の指
おちきりぎりすの糸は舞の指の指
おちきりぎりすの糸は舞の指の指
おちきりぎりすの糸は舞の指の指

原若
草山
草山

24
破刀
草山
草山
草山

蓮

蓮の葉は青く花は白く
 咲くは清く香は遠く
 池のほとりには
 風が吹くたびに
 花びらが舞い
 散る姿は
 美しく
 哀しく
 恋しく
 思ふ

蓮葉
 花白
 池邊
 風吹
 花舞
 散る
 姿美
 しく
 哀し
 恋し
 思ふ

浮

澤

池

蓮の葉は青く花は白く
 咲くは清く香は遠く
 池のほとりには
 風が吹くたびに
 花びらが舞い
 散る姿は
 美しく
 哀しく
 恋しく
 思ふ

蓮の葉は青く花は白く
 咲くは清く香は遠く
 池のほとりには
 風が吹くたびに
 花びらが舞い
 散る姿は
 美しく
 哀しく
 恋しく
 思ふ

蓮の葉は青く花は白く
 咲くは清く香は遠く
 池のほとりには
 風が吹くたびに
 花びらが舞い
 散る姿は
 美しく
 哀しく
 恋しく
 思ふ

蓮葉
 花白
 池邊
 風吹
 花舞
 散る
 姿美
 しく
 哀し
 恋し
 思ふ

蓮葉
 花白
 池邊
 風吹
 花舞
 散る
 姿美
 しく
 哀し
 恋し
 思ふ

蓮葉
 花白
 池邊
 風吹
 花舞
 散る
 姿美
 しく
 哀し
 恋し
 思ふ

石版子燈燈入中副の誌
あらの粉やあまを結ぶと大まひ
松の葉のよきと地まふらつて
生い茂るや子をあまの往中を
入のあまはくあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの

去来
之道
風緯
以我
起波
去路
珊瑚



